

大槻文彦年譜（洋学に注目して）

東北大学大学院文学研究科言語学研究室 後藤 斉

2017-08-26; 2019-02-18 改訂

西暦(元号) 事跡

- 1847 (弘化 4) 旧暦 11 月 15 日(冬至、新暦 12 月 22 日)江戸木挽町四丁目(現在の東銀座、歌舞伎座の近く)で生まれ、同所で生育。実名清復、通称復三郎、のちに号、復軒(「復」は冬至の「一陽来復」から)。父は漢学者磐溪(1801-1878. 清崇、平次、愛古堂、晩年は磐翁。「盤」と書くのは誤り)、祖父は蘭学者玄沢(1757-1827. 茂質、磐水)、兄は考証家如電(1845-1931. 修二)。翌年、種痘を受ける。
- 1851 (嘉永 4) 家学(漢学と詩文)を受ける。
- 1859 (安政 6) 関研次藍梁(膳所藩儒者)の門に入り、素読筆跡を学ぶ。翌年、水練、馬術を学ぶ。
- 1861 (万延 2、文久元) 林大学頭の門に入り、漢学修業(名目のみ)。
- 1862 (文久 2) 9 月洋書調所(開成所)に入り英学・数学を学ぶ。10 月元服。一家で仙台に帰住。
- 1863 (文久 3) 5 月仙台藩校養賢堂に入り文武の修業(漢学、剣術)、のち諸生主立(助教)に。
- 1865 (元治 2、慶応元) 「正権論」。「平泉游記」(平泉は 2011 年ユネスコ世界文化遺産登録)。
- 1866 (慶応 2) 磐溪が隠居し、如電が家督。閏 4 月、洋学稽古人を命じられて養賢堂で瀬脇節蔵(大築拙蔵。のち文彦の妹雪の夫)から蘭学・英学を学ぶ。9 月江戸に出て、10 月開成所に再入学。12 月横浜の横尾東作宅に住み、横尾から紹介されて翌年にかけて米国人 J. H. Ballagh から英学教授。
- 1867 (慶応 3) 1 月学資を稼ぐため英国人牧師 M. B. Bailey の『万国新聞紙』の編集員(「日本最初の新聞記者」。「大英国史」)。D. Thompson からも英学教授。10 月仙台藩江戸留守居役大重信太夫に従って京都に赴き、情報収集活動。「王政復古に付建言」。
- 1868 (慶応 4、明治元) 1 月鳥羽伏見の戦いを実見。『慶応卯辰実記』(3 巻. 自筆写本が宮城県図書館蔵)、『復古始末』(のちの写本が国立公文書館蔵)。3 月奥羽鎮撫使に従って仙台に戻るが、4 月藩命で横浜で英学修業、5 月江戸で「藩の探偵」(情報収集のほか銃器弾薬の買入も)。9 月プロシア船を雇い彰義隊残党らと仙台に戻るが、仙台藩は降伏。10 月横浜に逃れ、オランダやプロシアの商館に住まいつつ、再び Thompson の下で英学。
- 1869 (明治 2) 4 月箕作圭吾らと横浜のプロシア公使館内に起居。E. M. Van Reed と岸田吟香の『横浜新報もしほ草』の翻訳に協力。同月入牢した磐溪のため、仙台に戻って助命活動(翌年元日に出牢)。8 月『日本国誌』訳稿(1860 年米国刊の地理書の抜粋。早稲田大学図書館蔵)。西村傳九郎・岡本文平『北蝦夷地唐太島経歴記』の写本(宮城県図書館蔵)を作る。
- 1870 (明治 3) 東京に戻り、断髪、箕作秋坪宅(浜町津山藩邸内、現日本橋蛸殻町)に起居。大学南校に入り、英学・数学を学ぶ。「久奈志利御場所東西里數并川々所々小名漁場書上」の写本(宮城県図書館蔵)を作る。『北海道風土記』(30 巻)成稿(国立公文書館・宮城県図書館蔵. 巻 20 のみ 1997 刊)。
- 1871 (明治 4) 3 月箕作の英学私塾三叉学舎に入り、9 月幹事(塾長)。アルバイトで「賃訳」。このころから日本文法を志し、国学を独学。「箕作奎五墓誌」を撰文(谷中霊園)。
- 1872 (明治 5) 6 月 1 日壬申戸籍編成で仙台籍、名を文彦と改名。如電、文部省で『新撰字書』の編集に参加。10 月文部省八等出仕となり、字書取調掛で英和对訳辞書編纂を命じられる。『英和大字典』(第 2 巻(AI-AN)の原稿のみ早大図書館蔵)。
- 1873 (明治 6) 太陽暦に改暦、新元会を開く。『琉球新誌』(1995 複製)、『琉球諸島全図』(2017 複製)刊行。師範学校で教科書の翻訳・編集(『万国史略』(2 巻)翌年刊)、文部省で E. M. Sewell 著などから『羅馬史略』(10 巻)訳述(翌年刊)。宮城師範学校(変遷を経た後、1965 年に東北大学から分離して宮城教育大

学)初代校長として仙台に赴任(~1875)。

- 1874(明治7) 「宮城師範学校額面背文」(額面「師範学校」は磐溪書、宮城教育大学蔵)。『日本暗射図』(白地図)刊行(1884『新刻日本暗射図』『同指南譜』)。『^{アフリカ}亞非利加誌』(2巻)訳成(宮城師範学校をへて宮城県図書館蔵)。桜田欽斎『仙台方言』(1818ごろか)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995翻刻、2000影印)を作らせる。『史苑^{くんか}摺華』(2巻6冊)稿本(宮城県図書館蔵)。『樺太島ノ議』を建白(国立公文書館蔵)。
- 1875(明治8) 2月文部省報告課勤務となり、西村茂樹課長から日本辞書の編輯を命じられる。明六社定員。『万国史略 皇国部』刊行。諸葛^{もろくすのぶずみ}信澄『小学教師必携』に序(執筆は前年)。4月伊勢堂下の龍雲院(現青葉区子平町)の林子平墓(1942年国指定史跡)に「前哲林子平碑」(磐溪撰文)を建碑。磐溪・榊原吉野・西村・黒川^{まより}真頼・那珂道世・飯島虚心らと洋洋社に加わり、「擬奉英国女帝書」、「ペルリ日本記行中ノ訳文一節」、「日本文法論」。5月戸主如電が東京府に貫属替、10月に隠居して、文彦が家督相続。榊原と『色図釈』を述。
- 1876(明治9) 2月成島柳北に代わり一か月『朝野新聞』論説を担当し、「日本文章論」など。『小笠原島新誌 図附』刊。8月本郷^{きんすけ}金助町(現文京区本郷三丁目)に家を新築。「印刷術の史」、「日本「ジヤパン」正訛の弁」、「東洋印刷術の史」、「日本文字変革論」。12月前期文法会第1回(中根^{きよし}淑・那珂・横山由清・黒川ら参加。1878年7月まで16回)。
- 1877(明治10) 「日本文典編輯総論」。「伊達政宗ガ遣欧使ノ記事」。『支那文典』(2巻。高第丕(T. P. Crawford)・張儒珍共著『文学書官話』(1869)に解説を付した)刊行(1994複製)。「君主ヲ称スル語各国相似タルノ考」。如電『日本洋学年表』(1927年『新撰洋学年表』、1965年佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』)。如電『追遠会誌』(前年の玄沢五十年祭記録)。富田鉄之助ら旧藩士と伊達家当主宗基が経ヶ峯瑞鳳殿(現青葉区霊屋下。1931年国宝指定、1945年戦災で焼失。1974年再建、1984年「経ヶ峯伊達家墓所」として仙台市指定史跡)敷地に建てた仙台藩戊辰戦争戦没者の「弔魂碑」(鉄製。2011年東北大学金属材料研究所により修復)の碑文を作る。磐溪著伊藤介一註解『近古史談註解 初篇』を校閲。
- 1878(明治11) 「小西湖佳話」(~1881)。6月13日磐溪没。10月後期文法会第1回(1882年4月まで57回)。「広日本文典」を起稿。「竹島松島の記事」。北畠卓郎『小学必用仮字問答』を閲。中野豊記編『小学日本暗射図附録読例』を校。
- 1879(明治12) このころ在英の富田の勧めで渡英を図り、家を売却するが、断念。伊香保温泉楽山館で湯治し、主人木暮八郎の依頼で『伊香保志』(3巻)を執筆(1882刊、1988-89復刻)。田中芳男と四万、草津温泉にも足を延ばして「上毛温泉遊記」。このころ富田・木村^{のぶあき}信卿・佐和正・如電ら仙台人と同求社を興して、如電の校で林子平『六無齋全書』(1882)刊行など。「琉球の武備」。
- 1880(明治13) 『印刷術及石版術』(文部省『百科全書』(Chambers's Information for the Peopleの翻訳)の一分冊)刊行(1986複製)。「徳川氏の出版條例」。千葉文爾編訳『露国沿革史』を校正(1884『露^{ロシア}西亜国史』と改題、再刊)。
- 1881(明治14) 富田らと仙台造士義会を設立し、育英事業(1886年第二代会長)。鈴木慧淳・竹中邦香・如電らと白石社を興し、翌年にかけて新井白石『采覧異言』、『西洋紀聞』を校訂刊行。三又学舎旧友会を創立。十文字信介『農学啓蒙』を校。「磔刑は西洋より入りしといふ説」、「井伊直孝が裂きしといふ伊達政宗が百万石の墨付の現存する事」、「日光男体山に登れる記事」、「蜜蜂熱地に移りて蜜を醸さぬ話」。
- 1882(明治15) 「モチキルという語の活用」。奥日光湯滝の「^{こうざんとうばく}晃山湯瀑記」碑を撰文。『日本小史』(3巻)刊行。井上哲次郎抄訳^{ペイン}『倍因氏心理新説』を校訂。磐溪『近古史談』(1854,1864)を『^{きんしゅう}刪修近古史談』(4巻)として改訂、『^{きんしゅう}刪修近古史談 和文』で書き下し文に和訳(翌年藤江鶴詳解『^{きんしゅう}刪修近古史談詳解』を校閲、1894藤江卓三解『^{きんしゅう}刪修近古史談詳解』を訂。1899『^{きんしゅう}標註刪修近古史談』、1910『近古史談原文集』

- 刊行。1996-2000 翻刻版)。大槻清二注『標注忠経』を校閲。
- 1883(明治 16) 音楽取調掛兼勤(～1885)、里見義・加部巖夫と合議で「あふげば尊し」作詞。高崎正風らと「かなのとも」を創立(のち他と合同して「かなのくわい」)。『朝野新聞』等にかな文字論の論説を多数寄稿して、のち「仮名の会の問答」として『復軒雑纂』(1902)に収録。フィース著・土屋政朝訳『刪訂教育学』を閲。
- 1884(明治 17) 「外来語原考」。『言海』の草稿が完成。「日本帝国一統全図」。内藤いよと結婚。『磐翁年譜』刊行。伊達伯爵家の財産の名義変更尽力。
- 1885(明治 18) 「三味線志」編纂(1896/1897 刊)。『校正 日本小史』(3 巻、1963 複製)刊行。
- 1886(明治 19) 3 月 23 日『言海』稿本の再訂が終わり、文部省に提出(佐藤誠実が『言海』と命名、物集高見が保管)。第一高等中学校教諭(～1888)、これから手帳を愛用。『言語篇』(文部省『百科全書』)翻訳刊行(日本初の言語学紹介)刊行(1985 複製)。東京学士会院から『古事類苑』編纂委員(～1887)。富田・松倉 恂らの依頼で「英学校を設立するの趣意書」を起草(同年、半官半民の宮城英学校が新島襄校長で設立、翌年東華学校として清水小路(現若林区五橋)に開校)。
- 1887(明治 20) 宮勇墓誌(青山霊園)を撰文。菅沼貞風『大日本商業史 附平戸貿易志』に跋(1893 刊)。
- 1888(明治 21) 作並清亮編『松島勝譜』を校訂。「てがみのかきかた。」(この前後の大槻旧蔵「かなのくわい文獻集」が東北大学図書館蔵)。10 月 自費出版の条件で『言海』稿本が下賜され、富田、木村、大野清敬の援助に私財を加えて出版へ。
- 1889(明治 22) 5 月 15 日『日本辞書 言海』第 1 冊刊行。局外居士名義で『中止断行条約改正論』。
- 1890(明治 23) 憲法発布による前年の大赦令を受け、磐溪に大審院検事長名で罪科消滅の証明書。玄沢遺稿『金城秘鑑 仙台黄門遺羅馬使記事』を補綴(解説を付す)。『語法指南』(1996 複製)刊行。菅復三編『雅俗類編 東京名所指南』を閲。『東京須覧具』起稿(国立国会図書館蔵)。11/12 月、次女と妻、相次いで病没。
- 1891(明治 24) 4 月 22 日『言海』第 4 冊で完結。6 月 23 日芝の紅葉館で完成の祝宴(富田・高崎らの発起で、伊藤博文・勝海舟・榎本武揚・加藤弘之・菊池大麓(箕作秋坪の子)・高田早苗・陸羯南(宮城師範学校での教え子で、大槻離任後に中退)・矢野竜溪・物集・西村・如電らが参加し、西村・加藤・伊藤らが祝辞。福沢諭吉は出席取りやめ)。
- 1892(明治 25) 小栗ふくと再婚。岩手県西磐井郡中里村(現一関市)に転籍。宮城県尋常中学校(閉校した東華学校の敷地校舎備品を借用し、生徒を編入。新入生に吉野作造。のち宮城県立仙台第一中学校、戦後に宮城県仙台第一高等学校) 初代校長として仙台に赴任(～1895. 倫理の講義も)、宮城書籍館(現宮城県図書館)館長を兼務(～1897)。岩手で大槻家祖三百年祭(9.4)。『林子平先生年譜』刊行。栗原郡鶯沢村(現栗原市)の「清水和兵衛君紀功碑」を撰文(翌年除幕)。伊達家 陸 爵運動に協力して、翌年にかけて請願書草案(一関市博物館蔵)を起草。橋本光秋『国語のはしたて 普通教育初学仮名遣』を校。
- 1893(明治 26) 3 月松倉・大童・作並らと仙台文庫会設立(1896 年、伊達家蔵書等を含む図書館仙台文庫を東三番丁に開設。のち宮城県図書館蔵伊達文庫に)。茂ヶ崎の大年寺(現太白区門前町。惣門は 1985 年仙台市指定文化財)の「撫松小倉翁遺徳碑」を撰文(依頼した小倉長太郎は種痘を普及した撫松小倉三五郎の孫。その子に小倉博(国文学者、二高教授、郷土史家、斎藤報恩会博物館学芸員)・進平(朝鮮語学、京城大・東大言語学教授、『仙台方言音韻考 附浜荻』(1932)も)・強(東北大建築学教授、瑞鳳殿再建の基本設計)らの六兄弟)。12 月外記丁(現青葉区)の自宅で「愛古堂所蔵展」開催。
- 1894(明治 27) 第二高等中学尚志会で講演「日本洋学ノ起原」(3.21)。「支倉六右衛門墳墓考」(仙台市北山の光明寺(現青葉区青葉町)に比定)。「陸奥太守義良親王遺蹟考」。支倉六右衛門祭(7.1)。鈴木省三「支倉六右衛門常長之伝」を閲。「三石大綱碑」(?)を撰文(?)。教員免許状のない本多浅治郎(光太郎の兄。「浅

- 次郎」とする資料は誤りを教諭申請した件で文部省から譴責(11.7)。
- 1895(明治 28) 「陸奥国桃生城ノ考」(桃生城跡は現石巻市)。桜田贅庵『方言達用抄』(1827)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵)を作らせる。東京へ移住。
- 1896(明治 29) 「陸奥国伊治城ノ考」(伊治城跡は現栗原市、2003 年国指定史跡)。仙台市榴ヶ岡(現宮城野区)の榴岡天満宮(2015 年国指定名勝「おくのほそ道の風景地」に追加)の「星君恂太郎碑(星恂太郎碑)」を撰文(「仙台」と肩書き。題額は榎本武揚)。
- 1897(明治 30) 『**広日本文典**』、『**広日本文典別記**』(いずれも 1975 複製)、『中等教育日本文典』刊行。6 月、磐溪二十回忌に如電らと上野の日本美術協会で「愛古堂蔵品展」を開催し(追遠展覧会入場人控簿の写本が早大図書館蔵)、磐溪遺文集『寧静閣集』(4 集 15 冊)を刊行(~1907)。伊達綱村ら編『伊達出自世次考』(仙台文庫会刊)に「伊達出自正統世次考序」(「仙台旧文学」と肩書き)。高等師範学校国語科講師(~1899)。「先代萩実話」。伊達家蔵書寄託仙台文庫蔵の匡子『浜荻』(江戸末期か)の写本を作らせる。
- 1898(明治 31) 『**和蘭字典文典の訳述起原**』。7 月如電次男茂雄を養子に。10 月「一関尋常中学校落成式賀章」(「西磐井郡中里村処士」と肩書き)、『日本文典初歩』刊行。「漢文訓点の弊」。『南部系譜』稿(?)翌年『南部世譜附録』。いずれも斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵)。
- 1899(明治 32) 文学博士(3.27)。海嘯罹災者への寄付により宮城県岩手県から木盃。『松浦玉圃伝』刊行。「支倉六右衛門ニ関スル考証」、「陸前国宮城郡福室村正平親王御碑考」、「陸奥多賀国府所在地考」。南六軒丁(現青葉区片平)の宮城県中学校新校舎(大槻図案、山添喜三郎設計)の落成式で演説(7.20)および学友会で講演「**仙台出身の蘭学家**」(7.23)。大槻平泉先生五十年祭に参列(7.22)。宮城県教育会で講演(7.25)し、「寛文万治年間の伊達家の内訌」。「**高野長英行状逸話**」。『松島遊覧の栞』、『**Guide to Matsushima**』刊行(松島は 1923 年国指定名勝、1952 年特別名勝)。「陸奥国多賀国府所在地考」。南葛飾郡渋江村西光寺(現葛飾区四つ木)の葛西清重墓(1952 年東京都史跡、1955 年旧跡指定)に墓標を建立(「二十三世孫」と肩書き)。堀田正敦『仙台言葉』(1786 以前か)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995 翻刻、2000 影印)を作らせる。
- 1900(明治 33) 国語調査委員(国語調査会。前島密・上田万年ら)(~1902)。東京市に転籍(4.18)。『日本文法教科書』(2 巻)、『伊達行朝勤王事歴』(3 巻。序で「仙台旧臣」と肩書き)刊行。「**仮名と羅馬字との優劣論**」、「掛り結びの間の氏爾乎波の「と」に就て」。「多賀国府考」(多賀城跡は現多賀城市、1922 年国指定史跡、1966 年特別史跡)、「信濃の国府及国分寺」。講演「**洋学開祖諸哲の苦学**」。「超越山西光寺略縁起」(「旧仙台藩士」と肩書き)。「常陸の霞浦の地変」。永昌寺(現青葉区新坂町)の「菅文三墓誌」(現存確認できず)を撰文。
- 1901(明治 34) 根岸倶楽部の立案で『東京下谷 根岸及近傍図』刊行。帝室博物館列品鑑査掛嘱託。「陸奥国遠田郡小田郡沿革考」(天平産金地涌谷説を支持)、「陸奥国古駅路考」、「葛西氏について」、「的の字の誤用」。『伊達政宗南蛮通信事略』刊行(英訳つき)(1908 再版)。『修正日本文法教科書』(2 巻)を刊行。開成館編輯所編・大槻校『国語綴字法教科書』を刊行。日暮里村大字金杉(現荒川区東日暮里四丁目)の新宅(雨松軒)に転居(根岸御行の松そば。松は現台東区根岸、1925 年天然記念物指定、大槻没の 1928 年夏枯死)。「古屋佐久左衛門君追遠碑」を撰文(1975 年福岡県小郡市に建碑)。加美郡小野田村(現加美町)の「中羽前新道碑」を撰文(?)。三木五百枝・大塚彦太郎編『太平記詳解』に序、高橋紫燕『独眼龍伊達政宗』に序。娘さちに猪苗代兼郁『仙台言葉(仙台方言)』(1720)の写本(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵。1995 翻刻、2000 影印)を作らせる。
- 1902(明治 35) 『日本文法中教科書』、『復軒雜纂』(玄沢『**金城秘韞**』を再録)刊行。国語調査委員会主査委員(~1913。加藤弘之委員長、上田主査委員ら)。「国語改良の話」、「伊達政宗卿夫人田村氏の話」、「伽羅

先代萩の話」。下飯坂^{ひではら}秀治編『仙台藩戊辰史』を校訂(資料提供も)。『蘭学会盟新元会図』(福井信敏模刻)作製。三木佐助『玉淵叢話』に序。

1903(明治 36) 「胡弓と三味線との話」。

1904(明治 37) 北原雅長『七年史』下巻に序(「仙台」と肩書き。北原はこの著のため不敬罪で神田警察署に拘留)。寺崎清賢編『奥州高館沿革志 一名平泉史蹟研究』を校閲(1908 刊)。「国語の発展につきて」。

1905(明治 38) 『新体日本文法教科書』(4 巻)刊行(参考『新体日本文法教科書』に就きて)、『新体日本文法教科書備考』)。「日本方言の分布区域」、「**対訳辞書の起原**」。桃生郡広淵村(現石巻市)の「陸軍少尉勲六等功五級志村萬吉君墓碑銘」を撰文。

1906(明治 39) 「丙午と火災」、「口語の八衢^{やちまた}」、「都々逸論」。牡鹿郡石巻町(現石巻市)海門寺跡の「日露戦役従軍死者昭忠碑」を撰文(文中で自分を「旧藩士」と)。

1907(明治 40) 仙台一中校舎(大槻の「記念物」)全焼(1.24)。8 月伊香保温泉村松旅館に逗留して、主人村松秀茂、その実子東条操(同年秋東大國語科入学、のち方言学者、学習院大教授)とともに大槻撰文「弁天滝記」碑(1899 年木暮八郎が建碑を担当)を見る。「故大槻磐溪の逸事」。『**箕作麟祥君伝**』刊行(1940, 1967, 1983, 2004 複製)。芳賀剛太郎『誤似明弁 新案漢字典』に序。杉田玄白先生贈位祝賀会(12.22)で講演「**杉田玄白先生伝**」。秋田県由利郡亀田町(現由利本荘市)天鷲神社の「忠烈碑」を撰文(?)。

1908(明治 41) 「松島は地変の陥落に成りしかの考」。贈位先哲祝典大会(2.23)で講演し、帝国教育会編『六大先哲』に「**青木昆陽先生に就て**」。3 月遠田郡涌谷町黄金山神社(1967 年「黄金山産金遺跡」として国指定史跡)の「日本黄金始出地碑」を撰文。臨時仮名遣調査委員会委員(～同年末)。如電らと「**大槻磐溪三十年追遠展覧会**」(6.26-28)を上野公園日本美術協会列品館で開催し、如電口授『磐溪事略』に補言。9 月光明寺の「**支倉六右衛門紀功碑(支倉六右衛門之碑)**」を撰文。山内啓二述・松浦玉圃記『**紅療法講演録**』に序。

1909(明治 42) 『伊達騒動実録』(2 巻)刊行(1970 複製)。「伊達騒動に就き世伝の弁妄」、「陸前石巻吉野先帝碑考」(吉野先帝菩提碑は、1975 年「多福院板碑群」として石巻市指定有形文化財)。「宮城県立仙台第一中学校校歌」(前年に現若林区元茶畑に新校舎)。今泉寅四郎『仙台人物史 仙台近古史談』に序、臼田寿恵吉『日本口語法精義』に序。横浜開港史料展覧会に西川如見『四十二国人物図説』、林子平自画賛『和蘭船図』などを出品。

1910(明治 43) 「伊達騒動実話」。木村信卿墓誌(谷中霊園)、**十文字信介墓誌**(現文京区海蔵寺)を撰文。館山漸之進^{まんのしん}『平家音楽史』に序(漸之進の子、館山甲午は 1969 年平曲の無形文化財保持者)。目黒順蔵『処世之誤 一名誠世痴談』に序(1914 刊)。

1911(明治 44) 「多賀城多賀国府遺蹟」(多賀城碑は 1998 年国指定重要文化財)。3 月帝国学士院会員。4 月仙台市榴ヶ岡の「北村木村君頌徳碑」を撰文。10 月目黒不動尊瀧泉寺(現目黒区下目黒)の「**昆陽青木先生碑**」を撰文(境内の青木昆陽墓は 1943 年国指定史跡)。「仙台浄瑠璃の考」、「天保二年設立図書館青柳館文庫並青柳文蔵伝」(文庫蔵書は宮城師範学校をへて宮城県図書館・宮城教育大学蔵など)、「です言葉」。森慎一郎『**新撰漢文典**』に序。玄沢に贈正五位、東京の贈位祭典に**資料出展**、仙台で贈位祭。

1912(明治 45、大正元) 坂本嘉治馬(富山房)と『**言海**』**増補契約**(5.15)。「根岸御行の松」(1926 再刊、1989 複製)。『佐藤素拙伝』、『万葉集修身歌』。早大図書館「**文明源流表彰展覧会**」(5.4-6)に出品し、講演「**日本文明之先駆者**」。稲村三伯^{うながみずいお}『海上随鷗』百年祭(6.11)に**対訳辞書類**を陳列し、講演。小名浜二ツ橋(現いわき市)の「仙台藩戦死者之碑」を撰文。「殉死を論ず」。今泉寅四郎『仙台風藻』に序。

1913(大正 2) 妻ふく没(4.20)。登米郡佐沼町(現登米市)の「貞山公營址碑」を撰文。市川源三と共著で『高等女学読本備考』刊行。「山田孝雄^{よしお}氏の平安朝文法史を読みて」、「仏教語より出たる普通語」、「伊達騒動の真相」。県の依頼で仙台藩の英傑 13 人(伊達政宗・綱村・重村・堀田正敦・片倉小十郎・支倉常長・

林子平・大槻平泉^{へいせん}・玄沢ら)を選定。西原柳雨『川柳膝栗毛』に序。『仙台伊達家殉死者録』(斎藤報恩会をへて仙台市博物館蔵)。

- 1914(大正 3) 「論語研究に就いて」、「伊達騒動について」、「八代将軍と蘭学輸入」。桃生郡須江村糠塚(現石巻市)に「大槻但馬守平泰常殞命地」碑(12.3)を、西磐井郡金沢村大槻(現一関市花泉町)に「大槻但馬守平泰常館址」碑(12.4)を建碑撰文(「十世孫」と肩書き)。青葉神社奉賛会の社格昇格・経ヶ峯移転運動に資料提供(青葉神社は 2018 年国の登録有形文化財答申)。勅任官待遇。
- 1915(大正 4) 「吾邦蘭学勃興の原因」、「辞書編纂の苦心談」、「珍書の複本の必要」。『奥州宇津峰北畠顕信卿事蹟』(宇津峰は 1931 年国指定史跡)。作並清亮編『東藩史稿』に序。遠田郡教育会編『伊達安芸公』を校閲。北海道有珠郡伊達村(現伊達市)鹿島神社(伊達神社)の「伊達村開拓紀功碑(伊達村開拓記功碑)」を撰文(のち同市開拓記念館庭園に移設)。
- 1916(大正 5) 従七位から正五位に昇位。大槻の立案起草で国語調査委員会編『口語法』、翌年大槻の担任編纂で同『口語法別記』(いずれも 1980 複製)刊行。高松凌雲墓誌を撰文(谷中霊園)。昌住『新撰字鏡天治本』(898-901 ごろ成立、1124 写)を山田孝雄と共編、複製。法書会編『袖珍 五体字類』に序。
- 1917(大正 6) 仙台の戊辰戦役殉難者弔魂祭に招かれ、県庁構内武徳殿で講演(10.10)、白河の弔魂祭でも講演(10.14)し、「戊辰の挙兵は尊王の精神より起る」、「仙台藩挙兵の懐旧談」。箕作塾同窓会解散。所蔵の青木昆陽自筆『和蘭文字略考』を複製、解説。河東田経清『横尾東作翁伝』に序。牡鹿郡石巻町(現石巻市)多福院の「勝又晴敏君遺功碑」を撰文。
- 1918(大正 7) 仙台市公会堂の肯山公[伊達綱村]二百年祭(7.27)で講演「肯山公御治蹟」(「三百年祭」とする資料は誤り)。東磐井郡藤沢村(現一関市)の「藤崖佐伯君頌徳碑」を撰文。一関に「贈正四位大槻玄沢邸址」碑を建碑(?)。
- 1919(大正 8) 「著述病 老体の文彦翁訪問客を謝絶 言海の増補に苦心」(『東京朝日』2.9)。亀田次郎『山片蟠桃翁の事蹟』に序。「国語語原考」、「昆陽先生事歴」。
- 1920(大正 9) 志羅山頼順・菅野弘編『平泉名勝誌』に序。
- 1921(大正 10) 「瑞鳳殿前の弔魂碑の話」(10.3?)。
- 1922(大正 11) 小野清『天文彙考』(『天文要覧』と合冊)に序(1925 刊)。従四位。仙台一中創立三十年記念式(6.6)で講演。殉職(7.7)した小野さつき訓導へ弔慰金と弔詞(蔵王町立宮小学校内小野さつき訓導遺徳顕彰館に展示)。仙台叢書刊行会編輯顧問、第 1 巻に序。吉野作造、大槻校訂『西洋紀聞』も参考に「新井白石とヨワン・シローテ」を執筆。学制頒布五十年記念祝典(10.30. 於東大)で記念表彰牌。東磐井郡摺沢村(現一関市)の「小原磨溪翁頌徳碑」を撰文。
- 1923(大正 12) 「学術研究上の注意」(仙台一中学友会『創立三十年記念号』)。吉野は、同号に「大槻先生が明治に於ける語学界の大先覚である点に因み」として「西洋人の日本語研究」を寄稿し、「ドンケル・クルチウス日本文典を主題として」(『中央公論』)でも大槻に言及。大槻平泉『経世体要』(『仙台叢書』2 巻)に解題(1918 つけ執筆。「堂弟」と肩書き)、藤原相之助他編『登米郡史』(1972 複製)に序。
- 1924(大正 13) 2 月皇太子成婚にあたり、伊達行朝・綱村・葛西清貞・支倉常長らに贈位、磐溪には贈従五位、6 月仙台市公会堂での贈位記念祭で行朝勤王事歴を講演、翌年刊の小原保固編『贈位八譜』に「伊達行朝卿事蹟」、「葛西清貞事蹟」、1926 年刊の宮城県図書館編『甲子紀元節贈位者伝』に「伊達行朝」、「葛西清貞」。斎藤荘次郎編『贈正四位葛西清貞公伝』に序。吉野ら宮城県尋常中学校教え子の壬辰旧雨会から、喜寿の祝いに木彫の胸像(曾村芳邨作)を贈られる(仙台一高蔵)。それをもとにしたブロンズ像が 1969 年除幕され、同校内に展示)。
- 1925(大正 14) 講書始の講師(「秋津洲の起源について」)。勲四等瑞宝章。
- 1928(昭和 3) 2 月 17 日自宅にて没。法名、言海院殿松音文彦居士(「松陰」と書く資料もあるが、採らな

い)。正四位に追陞。現港区高輪の東禅寺(初のイギリス公使館の地、2010年国指定史跡)の、玄沢・磐溪も眠る一族の墓所(「大槻玄沢埋葬の地」として1983年港区指定旧跡)に葬られたが、墓は非公開。『言海』増補はサ行まで成稿。『国語と国文学』5巻7号「大槻大矢両博士記念」に年譜、自伝、著書論文目録ほか追悼記事。

- 1929(昭和4) 「仙台城本丸御殿記」(「遺臣」と肩書き。仙台城(現青葉区)は2003年国指定史跡)。
- 1932(昭和7) 如電(前年に没)・大久保初男・新村出らにより『大言海』第1巻刊行(1937年、第5巻索引で完結)。「大言海」刊行記念祝賀会(11.10.丸の内東京会館、約500名参会)。
- 1934(昭和9) 仙台市斎藤報恩会館で大槻文彦先生七回忌記念講演会(小倉博「大槻先生の思ひ出」、山田孝雄「国語(?)学史上より見たる大槻先生」)、遺物展(2.17)。
- 1938(昭和13) 『復軒旅日記』(大槻茂雄校訂)刊行。
- 1943(昭和18) 如電旧蔵書(洋学関係書811部、1876冊)が静嘉堂文庫に受け入れ(文彦旧蔵書も含む)。
- 1949(昭和24) 『言海』第1000版(紙型焼失のため最終版)。
- 1950(昭和25) 大槻家から『言海』自筆稿本、『広日本文典・別記』自筆稿本、旧蔵書など71点215冊が宮城県図書館に寄贈され「大槻文庫」、展示会開催。
- 1953(昭和28) 早大図書館が大槻家旧蔵資料約80部120点を購入し「大槻文庫」(のち、他資料と併せて「洋学文庫」)、「開国百年記念洋学展覧会」開催。
- 1956(昭和31) 『新訂大言海』刊行(1959年大槻茂雄増補『新言海』、1982年『新編大言海』)。
- 1968(昭和43) 明治百年記念宮城県式典(10.23)で先覚者として大槻が顕彰(ほか、富田・鈴木文治・落合直文・本多光太郎・志賀潔・土井晚翠・吉野・真山青果・阿部次郎ら計16名)。
- 1978(昭和53) 高田宏『言葉の海へ』刊行(新潮社、のち岩波書店、洋泉社、2018年新潮文庫)され、大佛次郎賞と亀井勝一郎賞を受賞。
- 1980(昭和55) 山田俊雄編集責任『稿本 日本辞書言海』(宮城県図書館蔵自筆稿本の複製および初版4冊本複製と図録)刊行。
- 1982(昭和57) 一関市役所に「大槻文彦先生の像」(佐藤紘行作)設置。
- 1984(昭和59) 国鉄一ノ関駅前に「大槻三賢人像」(西村栄一作)設置。
- 1989(昭和64、平成元) 宮城県図書館で「「言海」刊行100年記念 大槻文彦展」。宮城県図書館奉仕課調査相談係編『大槻家関係資料所在目録』。
- 1991(平成3) 一関市で「言海」刊行百年記念事業(展示会、シンポジウムなど)。
- 1994(平成6) 早大図書館蔵「大槻玄沢関係資料」169点(「芝蘭堂新元会図」、『重訂解体新書』稿本、『江戸ハルマ』写本など)が国の重要文化財に指定され、翌年「おらんだ正月200年 大槻玄沢関係資料重要文化財指定記念 早稲田大学図書館所蔵 洋学資料展」(2000年ライデン大学、ボン大学、早大で蘭学資料展)。
- 1997(平成9) 一関市博物館が開館し、常設展のコーナーに「文彦と言海」と「玄沢と蘭学」等。
- 1998(平成10) 飛田良文他編『明治期国語辞書大系』第1期第2回配本の1巻として『言海』が複製。
- 2000(平成12) 「20世紀デザイン切手」シリーズ第7集に「「大言海」大槻文彦」。一関市博物館で企画展「はるかなるヨーロッパ～蘭学者大槻玄沢の世界認識～」。
- 2001(平成13) 仙台市博物館蔵「慶長遣欧使節関係資料」47点が国宝に(2013年、うち3点がユネスコ記憶遺産(世界の記憶)に)。
- 2002(平成14) 『復軒雑纂1 国語学・国語国字問題編』刊行(3分冊の予定だが、2以降未刊)。
- 2003(平成15) 宮城県図書館蔵の『言海』自筆稿本(32冊)、『北海道風土記』稿本(同草稿6冊、自筆書き込みの『琉球新誌』『小笠原島新誌』を含めて)、伊達家旧蔵『生計纂要』(玄沢ら訳『厚生新編』の初稿)

等が**宮城県有形文化財に指定**され、「宮城の至宝展」。

2004(平成 16) ちくま学芸文庫から『**言海**』縮刷版(1904)の複製が刊行。一関市博物館で企画展「大槻磐溪 ～東北を動かした右文左武の人～」。

2005(平成 17) 伊達家旧蔵・宮城県図書館蔵玄沢ら編『環海異聞』写本、玄沢『金城秘韞』写本、磐溪編『英文翻訳^{ベルリ}彼理日本紀行』稿本が宮城県指定有形文化財に。

2007(平成 19) 一関市博物館で「GENTAKU ～近代科学の扉を開いた人～」展。

2011(平成 23) 一関市博物館で『言海』誕生 120 周年 ことばの海 国語学者大槻文彦の足跡」展。

2013(平成 25) 大槻家資料 5100 点が一関市博物館に寄贈、「大槻家旧蔵板木」142 点(文彦『伊香保誌』、『小笠原島新誌』、玄沢『蘭学階梯』、『瘍医新書』、磐溪『合衆国小誌』等)が岩手県指定有形文化財に。

2014(平成 26) 一関市立一関図書館が開館し「言海コーナー」設置、「大槻文彦先生の像」を市役所から移設。一関市博物館で「板木と和本の世界」展(「大槻家旧蔵板木」など)。